

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

特集陳列 徳川家康没後四百年記念 徳川将軍家と京都の寺社 ― 知恩院を中心に ―

に 似ている、に 似ていない？

じゅうようぶん かざい とくがわいえやす ざぞう ちおんいんぞう
 重要文化財 徳川家康坐像 京都・知恩院蔵

京都の祇園の近く、東山の麓に知恩院という大きなお寺があります。このお寺自体は、鎌倉時代に法然（1133—1212）という浄土宗を開いた偉いお坊さんのお墓から出発し、法然の教えを慕う人々によって大きくなっていったものです。しかし、現在のよう規模になったのは、江戸幕府の創始者である徳川家康（1543—1616）が、母・於大の方（1528—1602）の冥福を祈るために手厚い支援を加えるようになったからです。

ですので、知恩院では、今でも、於大の方と家康、そして家康の息子で引き続き知恩院を引き立てた二代将軍・徳川秀忠（1579—1632）をととても大切にしています。

知恩院には、御影堂という一番大きな建物があります。これは、最も大切な法然の御影（肖像）をおまつりしたことからその名があり、現在のよう大きさになったのは家康のお蔭です。残念ながら、家康の命令で建てられた御影堂は寛永10年（1633）に焼けてしまい、現在の建物は家康の孫の三代将軍・徳川家光（1604—51）が寛永16年に再建したものです。このお堂の内部、正面向かって左の西の仏壇に於大の方（図2）、家康（図1）、秀忠（図3）の木で作られた肖像が3体おまつりされています。

最初に、於大の方像が作られたとされ、その後ほどなくして家康の命により家康自身の像と一緒に安置されたと伝えられています。その後、元和6年（1620）に七条仏師・康猶によって秀忠像が制作されました。この秀忠像は、本人自身の命で作られた寿像（生きていた間に作った肖像）であるせいか迫真の出来映えです。そして、この三つの像が並ぶとよく似ており、親子の血の濃さを感じることができ



図1 重要文化財 徳川家康坐像 知恩院蔵

ます。家康像も、秀忠像と同じ康猶によって家康死没の直前に作られたと見られています。しかし、この時、家康は70歳を超えていたと考えられますが、若々しい姿で表現されています。これについては、東京・芝東照宮の家康坐像（東京都指定文化財）と同一の思想によるとの説があります。芝東照宮像は、慶長6年（1601）、家康還暦（60歳）の時、造像で、厄年にあたる42歳の折の姿に基づくものとされ、やはり40歳くらいの姿で表現されています。



図2 於大の方坐像 知恩院蔵



図3 重要文化財 徳川秀忠坐像 知恩院蔵

肖像というのは、似ていることに意味があるはずですが、必ずしも現実そのままを写すことに意味があったわけではないところがミソです。やはり欠点は目立たなくしたい気持ちは働くわけで、寿像の場合は特にそれが現れます。独眼竜で有名な伊達政宗（1567—1636）も、幼い頃の病気で右目を失明したことを終生苦にしており、後世に残す肖像は両目をきちんと表現したものにするよう遺言しています。

家康の場合、老いた姿を後世に残したくなかっただけなのかもしれませんが、もう一つの可能性があります。それは死後に神様として祀られることを本人が想定していたということです。家康は、死後は関東の鎮守として日光にお社を建てるように遺言を残しています。これが現在の日光東照宮で、東照大権現というのが神様としての家康の名前です。家康のライバルだった豊臣秀吉（1536—98）も豊国大明神となっておりますので、それを意識していたのでしょうか。日本の神様は若々しさに力を見出していましたので（神社の定期的な造り替えや若宮への信仰などはそのあらわれです）、家康自身は一番気力充満していた時期の姿を後世に残したいと思ったのかもしれません。

しかし、家康の孫である家光は、母・御江与の方（1573—1626）に愛された弟の忠長（1606—34）に將軍職の後継を脅かされた際に、自分を後継に指定してくれた家康を終生敬愛し続けました。家光にとっては幼き日の優しい祖父の面影が強かったのでしょうか、家康の肖像は最晩年の姿で描かれることが多くなります。家康が後世に残したかった自分の姿を、この木像からしのでいただけたらと思います。

（保存修理指導室長 大原嘉豊）